

フランス語不定代名詞 *on* の諸用法と通時的考察*

鈴木拓真, 中川亮, 川口裕司

0. はじめに

主語が人間であることを標示する不定代名詞 *on* が現代フランス語において、多様な用法を持っていることはよく知られた事実である。不特定の人間を指すこともあれば、特定の人間を指すこともあり、はたまた人称代名詞の代替としても用いられる。

興味深いことに不定代名詞 *on* は「人間」を意味するラテン語の普通名詞 *HOMŌ*¹⁾に端を発している。本論では、不定代名詞 *on* が代名詞としての諸用法を獲得した経緯を通時的に考察することにした。

本論の構成は以下の通りである。まず第1節で、現代フランス語における *on* の多様な用法を簡単に提示する。第1節における用法の分類をもとに、第2節では不定の対象を指示する用法を中心に *on* を通時的に考察していく。

1. 現代フランス語における *on* の諸用法

不定代名詞 *on* の諸用法における通時的变化を考察する手がかりにすべく、現代フランス語における *on* の用法を素描することにした。不定代名詞 *on* は語源となる *HOMŌ* 同様に指示対象が常に人間である。また *on* は主語位置でしか用いられない。用法の分類は Fløttum et al. (2007) や Viollet (1988) などの先行研究ですでになされているものの、その間には必ずしも一致を見ない。そこで本論文では、定性と特定性をパラメータとして分類を行う。不定代名詞 *on* の用法は、①不定の対象を指示する用法(1.1節)と②定の指示対象を指示する用法(1.2節)の2つに大別される。

1.1. 不定の対象を指示する用法

この用法における *on* はさらに①総称的用法、②非総称的用法、③除外的用法、④非人称的用法の4つに下位分類できる。

1.1.1. 総称的用法

この用法における *on* は、不定の対象を総称的に指示しており、*tout le monde*「みんな」、*tous les hommes*「人間全体」と同義であると言える。たとえば、(1)の *on* は文の意味から人間全体を指していると考えられる。

(1) Quand *on* a soif, *on* a le gosier sec.

「喉が乾いているということは、喉がカラカラということである」²⁾ (ALF 90³⁾)

また、(2)のように副詞句(*par ce temps*)で限定された環境下にいる人間を総称的に指示する場合もある。

(2) *Par ce temps, on ne peut pas dormir.* 「このような天候下では、眠ることができない」

(ALF 1083)

1.1.2. 非総称的用法

特定の用法⁴⁾とも呼ばれるこの用法では、上で述べた総称的用法とは対照的に、*on* の指示対象は不定でありながらも総称的ではなく特定の人間を指しており、*quelqu'un* 「誰か」などと同義である。(3)の *on* は、「扉をノックした」時点では指示対象が不定であるが、総称的ではない。

(3) *Vers 3 heures, on a frappé à ma porte et Raymond est entré.*

「三時頃、戸をたたく音がして、レエモンが入って来た」⁵⁾ (Albert Camus, *L'Étranger* : 59)

1.1.3. 除外的用法

この用法の大きな特徴は、*on* の指示対象は不定でありながらも、指示対象に含まれない人物が存在する点にある。(4)では、*on dit que* が伝聞のマーカ―として機能し、発話の場面にいる発話者と対話者の両方が *on* の指示対象から除外されている。

(4) *On dit que c'est bon de suer.* 「汗をかくことはいいことだそうだ」 (ALF 407)

除外的用法における *on* は、指示対象に含まれる人物と含まれない人物があえて区別されている点で、総称的用法とは異なっている。

1.1.4. 非人称的用法

この用法における *on* は、*on* が用いられることで文の主語が人間であることは標示されているものの、もはや誰も指示していないように考えることができ、Leeman (1991:106)で述べられているように *on* はもはや単なる文法的支え(*support grammatical*)としてのみ機能しているように思われる。こうした *on* によって、動作主は非焦点化されているといえる。

(5) *On glisse sur le sentier.* 「その小道では滑りやすい」 (ALF 651)

フランス語母語話者に確認したところ、(5)の文は (5')のように主語を指示代名詞の *ça* に置き換えても、文の意味に差異はほとんど認められないとのことである。

(5') *Ça glisse sur le sentier.*

このことより、(5)の *on* は誰も指示していないと考えることができるだろう。

1.2. 定の対象を指示する用法

前節で不定指示の *on* の諸用法について簡単にみてきたが、元来不定の対象を指示する代名詞であるはずの *on* が定の対象を指示する場合がある。ただし、本稿の第2節における通時的考察では不定指示の *on* について中心に言及するため、ここでは *on* が定の指示をする場合があることを簡単に提示するにとどめることにしたい。

不定代名詞 *on* は人間であれば誰でも指すことができるから、汎人称的 (omnipersonnel) な性質を帯びた代名詞であると考えられるが、この性質を帯びた *on* が発話の場にいる人物を指す場合がある。定の指示をする *on* の顕著な用法として、(6)のような1人称複数を指す用法をここではあげておく。⁶⁾

(6) MQ293 : *bah non vous êtes pas des gens*

「いいえ、あなたたちは人じゃないよ」

DR381 : *non nous on est exceptionnel*

「うんわたしたちは例外よね」

(ESLO2_REPAS_1260)⁷⁾

低いレジスターの現代口語ではほとんどの場合、1人称複数主語代名詞として *nous* ではなく *on* が用いられており、また比較的高いレジスターでも同様に *on* が用いられることは決してまれではない。また、この用法においては、(6)で示したように強勢形 *nous* と *on* が共起しうる点も特筆すべき点としてあげられる。

2. 通時的考察

現代フランス語における *on* の諸用法の通時的研究は、共時的研究ほど多くなされていないのが現状である。ただし、それは通時的研究の必要性が希薄であることを決して意味しない。Combettes (2006:126)の言葉を借りれば、「共時態の持ちうる不均質さのある側面について、その理由を検討するための有効な手がかりが、通時態を考慮することで得られる」のであり、それゆえ通時的視点を導入することには大きな意義があ

る。以下で行うような不定代名詞 **on** の通時的考察は、多様な用法を有する **on** を分析するにあたり非常に重要であるように思われる。この見通しのもと、不定代名詞としての機能の出現に焦点を絞って以下では考察していくことにするが、その前に **HOMŌ** から **on** への音声変化について簡単に触れておく。

2.1. **HOMŌ** から **on** への音声変化

歴史音声学的には、**HOMŌ** から **on** への音声変化は次のように説明される。

まず、語頭の **H** はすでに共和政末期のラテン語ですでに発音されなくなっており、人為的に表記の上では維持されているにすぎなかった。また、後ろから 2 つ目の母音に強勢の置かれる単語では **A** 以外の語末母音が脱落するため、**HOMŌ** の語末の長母音-**Ō** は音声的には弱化的・脱落したと考えられる。語頭の短母音 **O** は狭まって古仏語では **[o]** となった (**[om, on]** > **[om, on]**) が、これがさらに 12 世紀後半には後続する **[m]** もしくは **[n]** に同化して鼻音化した (**[om, on]** > **[õ]**)。 **[õ]** は、中世の終わりごろには広い母音 **[õ]** となり、これが現代フランス語における **on** の発音になったとされる。

HŌMŌ > **om, on** > **om, on** > **õ** > **õ**

HOMŌ から **on** にいたる音声変化

古仏語には発音・文法・正書法等に関する明確な規範が存在しないため、この図式に沿わない形式も文証される。たとえば、それは **[uõm]**, **[uẽm]** の系列⁸⁾で、これは強勢母音 **O** が二重母音化したものである。ただし、当時すでにこの語はしばしば動詞に対して後接的(**proclitique**)に用いられていて第一強勢を持ち得なかったことから、この系列の二重母音は縮減し、最終的に上図の系列に合流したものとされている(Fouché 1961:355)。13 世紀以降、この系列は標準的な古フランス語⁹⁾には見られなくなる(Rheinfelder 1963:84; Fouché 1961:382)。

この他、**an** と **en** といった綴りも頻繁に出現する。これらの綴りが発音を反映しているとする、前者は強勢母音の非円唇化によって説明され、後者は同様の非円唇化の後で開口度が狭くなったことによるものとして説明される。あるいは、後接的用法の下で **[uẽm]** から **en** への縮減を想定し、そこから母音が広くなることで **an** に変化したという説明も可能である。Fouché (1961:383)は、これら 2 通りの異なる経緯で生じた同音の語形が合流したとしている。古仏語には頻繁に現れるこの **an** と **en** は、**[uõm]**, **[uẽm]** の系列と同じく、現代の標準フランス語には残っていない。

2.2. 不定代名詞 **on** の出現

続いて、**on** の意味・機能について通時的考察を加える。

まず、主語位置でしか現れず、かつ主語の指示対象が人間であることを標示するという **on** の統語・意味

的特徴は、語源である HOMŌ のそれから説明できる。すなわち、主格形であり、「人間」を意味するという HOMŌ の性質が on に引き継がれたと考えればよい。

ところが、普通名詞である HOMŌ が不定代名詞 on へと変化した経緯は、語源や音声変化からは明らかにならない。古仏語期において on が第一強勢を持たず動詞に対して後接的に使用されていたということは、確かにこの語が語彙の意味を失いつつあったことを示唆するように思われる。しかしそれは必ずしも不定代名詞であったことを意味しない。そこで本節では、on が不定代名詞の機能を獲得した経緯について検討することにする。

第一に、この語がフランス語の成立以前からすでに文脈に応じて不定の対象を指示できたことに注目すべきであろう。以下はそれぞれ 4 世紀末頃、及び 6 世紀のものとするラテン語に見られる HOMŌ の用例¹⁰⁾である。ここで HOMŌ は漠然と「人」もしくは「ある人」を指示している。

(8) ubi homo desiderium suum compleri uidet

「人が己の望みの成就するのを目にするところで」

(*Peregrinatio Aetheriae*, 13.1., Maraval (Ed.) 1982)

(9) Quomodo potest se homo mortificare? 「いかにして、人は自らを死なすのでしょうか」

(*Vita patrum*, 7. 26. 1., Migne (Ed.) 1849)

この HOMŌ は現代フランス語の on によって訳出することができるが、それはあくまで HOMŌ と on の意味が一部重なっていることを示唆するにすぎない。たしかに、(8)や(9)のような例は HOMŌ が不定代名詞の価値を持ちえたことを示している(Fouché 1960:160; Weerenbeck 1943:69; FEW¹¹⁾ v.4, p458a-b, hōmo, -ine I 2)。しかし、Weerenbeck (1943:62)や Moignet (1965:58, 100)がいみじくも述べるように、それでもこの HOMŌ が現代フランス語の on と同様の価値を持っていると結論することはできない。この(8)や(9)では、この HOMŌ が tous les hommes 「すべての人間」の意味でなく、un homme 「ある人」もしくは quelqu'un 「誰か」の意味で解釈できる。言い換えれば、ここで HOMŌ は非総称的に不定の指示を行っている(1.1.2 節参照)。Weerenbeck (1943:58)によれば、quelqu'un として解釈可能な HOMŌ のこうした用法が、不定代名詞 on の生まれる素地を提供した。

(8)や(9)に見られるような HOMŌ の用法は、不定の指示を行うことによって結果的に動作主を非焦点化するものである。ところがよく知られているように、同様の機能を持つ表現はすでに存在していた。たとえば古仏語においては、三人称複数や受動態などがある(Buridant 2000:409)。従って機能主義的観点からすれば、古仏語の初期において on は特段必要でなかったと考えられる。実際に、ラテン語の受動態 DICITUR に対応する表現として(10)に挙げたような on dit que が見られるのは、古仏語期後半にあたる 13 世紀末以降である(Picoche et Marchello-Nizia 1994:230)。

(10) *et fu grant piece que on disoit qu'il estoit mort*

「そうして彼が死んだと言われてから長い時間が経った」

(*Grande Chroniques de France*, t. 9, ca.1340, BFM 2016)

Weerenbeck (1943:67-69)は、口語であった古仏語が、ALIQUISのようなラテン語の不定代名詞をそのまま不定代名詞として継承することはほとんどなく、それが不定代名詞 *on* の出現に大きく影響したという仮説を立てている。彼によれば、「古仏語は(中略)新しい代名詞の系列を作り上げなくてはならなかった」(Weerenbeck 1943:67-68)のために、不定の意味を表すことのできた名詞 *om* 「人間, 男」が *quelqu'un* 「誰か」の代わりにしばしば用いられた。ラテン語における *HOMŌ* が「ある人」「誰か」といった意味を持ちえたことから古仏語の名詞 *om* も同様の解釈を持ち、それゆえ *quelqu'un* と *om* とが交替可能な表現として使用され続けた結果、次第に代名詞的用法が獲得され、古仏語期中ごろ以降になって不定代名詞 *on* が出現したとされる(Weerenbeck 1943:69)。Weerenbeck (1943)が指摘する通り、この時期以降においては、明らかに不定代名詞であると考えられる *on* が見られる。

(11) *ço set hom ben [...]* 「(...)ということはよく知られているのだ」

(*Chanson de Roland*, v. 293)

(12) *On a veü souvent grant cuer en cors petit!*

「小さな体に大いなる勇気を見出すことがしばしばあったでしょう！」

(*Le jeu de saint Nicolas*, v.409)

Weerenbeck (1943)は不定代名詞 *on* の出現を 11 世紀以降と想定しているが、これに近い見解を表明する文献として Moignet (1965), Galambos (1981), Ménard (1973)などがある。Moignet (1965)と Galambos (1981)は不定代名詞 *on* の出現を 10~11 世紀とし、Ménard (1973)は 12 世紀であるとしている(Moignet 1965:58; Galambos 1981:69-70; Ménard 1973:45)。これらは、不定代名詞 *on* がすでに『ストラスブールの誓約(*Serments de Strasbourg*)』¹²⁾に見られるとする Nyrop (1979)や Damourette et Pichon (1983)¹³⁾とは対立する見解である。これらの研究は、Moignet (1965)を除くといずれも不定代名詞か否かを判断するうえで参照すべき基準を明確に挙げていない。Moignet (1965)は、*l'homme (en général)* 「人間(一般)」, *un homme* 「一人の人」, *quelqu'un* 「誰か」のいずれの解釈も適切でなく、行為主体がぼかされることで行為そのものに焦点がより強く当たる以下の用例に注目する。

(13) *Sainz Boneface, que l'um martir apelet.* 「殉教者と呼ばれている、聖ボニファティウス」

(*La Vie de Saint Alexis*, 566)

Moignet(1965:100)は、不定代名詞 *on* を形態・統語的基準で判断することはできないと述べたうえで、(13)のような *on* が不定代名詞であるとみなすことのできるものだとする。Moignet(1965)のこの基準も、定性的かつ内省に頼る部分が大きく客観性に欠けるきらいがあることは否定できない。このように明確な基準が欠けていること、もしくはそのような基準を立てられないことを理由に、不定代名詞 *on* が出現した時期に関して先行研究の間には若干の相違が見られるものの、11世紀～12世紀以降に不定代名詞 *on* を認めるというのが主流な見解のようである。

ただし、いずれにしても(11)～(13)のような古仏語期の用例は多くはない。現代フランス語では、動作主の非焦点化や不定指示の手段として *on* が多用されるが、このように *on* が他の選択肢よりも優勢になるまでにかかった時間は長く、17世紀以降にようやく今日と同程度の頻度で見られるようになった(Weerenbeck 1943:87)。1.2節で述べたような人称代名詞の代替用法が現代と同じくらい頻繁に使用されるようになるのは、さらに新しい時代である(Grafström 1969:276-277, 280)。

3. 結論にかえて

本論では、まず現代フランス語における不定代名詞 *on* の諸用法を簡単に提示した上で、続いて通時的考察を通じてこの語がフランス語に不定代名詞として定着した経緯を議論した。第1節で述べた通り、*on* の指示対象は不定であったり定であったり、また総称的であったり特定のであったりと多様な用法を有している。

その幅広い用法を有する *on* の諸用法の中で、不定の対象を指示する用法については、*quelqu'un*「誰か」や *un homme*「ある人」の意味で用いられたラテン語 *HOMŌ* との関係が深いことを主張した。不定代名詞 *quelqu'un* と名詞 *om* が互換可能であったことから *om* は次第に代名詞として機能するようになったが、並行してこの *om*, *on* は第一強勢を持たず動詞に対して後接的に使用されており、それによって音声的にも名詞 *om* とは異なる変化を遂げた。本論ではさらに、不定代名詞 *on* が11～12世紀ごろまでに出現したということも確認した。先行研究では不定代名詞として認定する基準が明確にされていないことを主な原因として、不定代名詞の機能が観察される時期について見解の相違がみられるものの、11世紀から12世紀にかけての時期には不定代名詞 *on* が存在していたとみなすのが適切であるように思われる。

古仏語期から近代までの期間については、定指示の *on* が頻繁に用いられるようになった時期、あるいは *en* に代表される *on* のヴァリエントの衰退過程など、本論で扱うことのできなかつた重要な課題が多く残されている。こうした問題に対しては、コーパスを用いた量的研究の蓄積がまだ少なく、さらなる研究が待たれるところである。これは今後の課題としたい。

注

*) 本稿は、日本ロマンス語学会第 56 回大会(於京都大学)における口頭発表「フランス語不定代名詞 *on* について①-*on* の諸用法とその通時的考察-」の内容を加筆・修正したものとなっている。ご助言やご批判をいただいた先生方に多大なる感謝を申し上げたい。

- 1) 引用する例文を除き、以下ではラテン語の単語・表現を小型大文字で表記する。
- 2) 以下、例文に付した訳文と強調は特にことわりのない限りすべて筆者による。
- 3) Jules Gilliéron らが作成したフランス言語地図(*Atlas linguistique de la France*)。また、*ALF* の直後に記されている数字は、*ALF* における地図番号である。
- 4) たとえば Fløttum et al. (2007:30)は、この *on* を特定の(*spécifique*)と呼称している。
- 5) 窪田啓作訳 (1952:48)。
- 6) 1 人称複数以外の人称を不定代名詞 *on* が指示する場合、発話文に特別な情意が生じることが、これまでの先行研究で指摘されている。本稿の趣旨からは逸れるため、ここでは深く議論しないが、一例だけあげておく。以下の(i)の *on* は対話者(2 人称単数)を指すが、*on* で指示することにより、発話文に愛玩(*hypocoristique*)の情意が生じているとされる。
 - (i) Alors, mon petit, *on* ne va pas à l'école aujourd'hui ?
「ところで、ぼうや、今日は学校に行かないの？」 (Blanche-Benveniste 2003:47)
- 7) オルレアン大学が公開する話し言葉コーパス。話し言葉コーパスであることから、句読点は書かれていない。例中の MQ293 などは、各インフォーマントに割り振られた ID である。
- 8) たとえば, Benoit de Sainte Maure の *Chronique des Ducs de Normandie* には *huem* が見られる。
 - (ii) Que *huem* neu vos set contredire.
「誰もあなたに向かってそれを否定できない。」(v.10809, *BFM2016*)
- 9) 12 世紀から 13 世紀には、パリ周辺 *Île-de-France* の言語が次第に「好ましい規範(*the desirable norm*)」(Rickard 1989:39)であるとみなされるようになった。
- 10) 同時期のラテン語に見られるその他の用例については、Väänänen (1981), Leumann et al. (1965)及び Salenius (1920)を参照。
- 11) von Wartburg (1922–2002)。慣例に従い、本論文ではこの辞典を略号 FEW によって表記する。
- 12) ただし、そもそも『ストラズブールの誓約』の言語を 842 年当時のフランス東北部のオイル語とみなすことについては批判がある。川口(2000)を参照。
- 13) ただし Damourette et Pichon (1983:288-289)では、「不定代名詞」ではなく「*on* *strumental*」と呼ばれている。

引用文献

- Blanche-Benveniste, C. (2003). Le double jeu du pronom *on*. In P. Hadermann, A. Van Slijcke et M. Berré (Eds.), *La syntaxe raisonnée. Mélanges de linguistique générale offerts à Annie Boone à l'occasion de son 60^e anniversaire*, Louvain-la-Neuve: De Boeck Duculot, 43-56.
- Buridant, C. (2000). *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Combettes, B. (2006). Grammaticalisation et parties du discours : la différenciation des pronoms et des déterminants en français. In C. Guillot, S. Heiden et S. Prévost (Eds.), *À la quête du sens : Études littéraires historiques et linguistiques en hommage à Christiane Marchello-Nizia*, Lyon: ENS Éditions, 123-135.
- Damourette, J. et E. Pichon (1983). *Des mots à la pensée : Essai de grammaire de la langue française* vol.4, Genève: Slatkine Reprints.
- Fløttum, K., K. Jonasson et C. Norén (2007). *ON Pronom à facettes*, Bruxelles: De Boeck et Larcier.
- Fouché, P. (1960–1961). *Phonétique historique du français*, vols. 2 et 3, Klincksieck.

- Galambos, S. J. (1981). *The Position of Personal Pronouns in French: A Diachronic Perspective*. University of Chicago, Ph. D. thesis, Ann Arbor, Michigan: U.M.I. Dissertation Services.
- Gilliéron, J et E. Edmond (1901). *Atlas linguistique de la France*. Editions du CNRS.
- Grafström, Å. (1969). *On remplaçant nous en français*. In *Revue de linguistique romane* 33(131-132), 270-298.
- 川口裕司 (2000)「書かれ始めたフランス語—Global Latin vs Local French—」『語学研究所論集』5, 1-23.
- Leeman, D. (1991). *On thème*, *Linguisticae Investigationes* XV, 101-113.
- Leumann, M., J. B. Hofmann, und A. Szantyr. (1965). *Lateinische Grammatik*, vol. 2: *Syntax und Stilistik*, (neubearbeitet von A. Szantyr mit dem allgemeinen Teil der lateinischen Grammatik). Munich: Beck.
- Ménard, P. (1973). *Syntaxe de l'ancien français* (new and entirely recast ed.). Bordeaux: SOBODI, Société bordelaise pour la diffusion des travaux de lettres et sciences humaines ; Bordeaux: Bière.
- Moignet, G. (1965). *Le pronom personnel français : Essai de psycho-systématique historique*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Nyrop, C. (1979). *Grammaire historique de langue française* vol.5 *Syntaxe, Nom et Pronoms* (4th ed. revised). Genève: Slatkine Reprints.
- Picoche J. et C. Marchello-Nizia (1994). *Histoire de la langue française* (3rd ed., revised and corrected). Paris: Nathan.
- Rheinfelder, H. (1963). *Altfranzösische Grammatik*, Erster Teil: *Lautlehre*. München: Max Hueber Verlag.
- Rickard, P. (1989). *A History of the French Language* (2nd ed.). London: Routledge.
- Salonius, A. H. (1920). *Vitae patrum : Kritische Untersuchungen über Text, Syntax und Wortschatz der spätlateinischen Vitae patrum (b. III, V, VI, VII)*. Lund: C.W.K. Gleerup.
- Väänänen, V. (1981). *Introduction au latin vulgaire* (3rd ed. revised et expanded). Paris: Klincksieck.
- Viollet, C. (1988). *Mais qui est on ? : Etude linguistique des valeurs de on dans un corpus oral*. In *LINX* 18, 67-75.
- Wartburg, W. von (1922–2002). *Französisches Etymologisches Wörterbuch: Eine darstellung des galloromanischen sprachschatzes* (25 vols.). Bonn; Leipzig; Basel; Bonn/Basel: Klopp; Teubner; Helbing und Lichtenhahn; Zbinden. Retrieved September 15, 2018 from <https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/>.
- Weerenbeck, B. H. J. (1943). *Le pronom on en français et en provençal*. Amsterdam: N.V. Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij.

コーパス

- ATILF - CNRS & Université de Lorraine. (2016). *DMF: Dictionnaire du Moyen Français*, version 2015 (DMF 2015). Retrieved September 15, 2018, from <http://www.atilf.fr/dmf>.
- ATILF - CNRS & Université de Lorraine. (n.d.). *Frantext*. Retrieved May 10, 2018, from <http://www.frantext.fr/>.
- ENS de Lyon, Laboratoire IHRIM. (2016). *BFM - Base de Français Médiéval*, version 2016 (BFM 2016). Retrieved

September 13, 2018, from txm.bfm-corpus.org.

Laboratoire Ligérien de Linguistique – UMR7270 (LLL). (n.d.). *ESLO*. Retrieved February 3, 2018, from <https://hdl.handle.net/11403/eslo/v1>.

引用テキスト

Camus, A. (1942). *L'Étranger*, Paris: Gallimard (窪田啓作訳 (1952). 『異邦人』新潮社).

Dufournet, J. (Ed.) (2005). *Le Jeu de saint Nicolas : Présentation et traduction*. Paris: Flammarion.

Maraval, P. (Ed.) (1982). *Égérie Journal de Voyage (Itinéraire): Introduction, texte critique, traduction, notes, index et cartes*, Paris: Éditions du Cerf.

Migne, J.-P. (Ed.) (1849). *Patrologiae Cursus Completus*. vol. 73. Paris.

Moignet, G. (Ed.) (1972). *La Chanson de Roland* (4^e éd. revue et corrigée). Paris: Bordas.

Storey, Ch. (Ed.) (1968). *La Vie de Saint Alexis : Texte du Manuscrit de Hildesheim (L) Publié avec une Introduction historique et linguistique, un Commentaire et un Glossaire complet*, Genève: Librairie Droz.